

## 金子文子——誠実さのアナキズム

倫理学研究 渡辺一樹

死後100年近くが経過して、大正日本のアナキストである金子文子が再注目されている。韓国では、映画「金子文子と朴烈」が公開され、明朗とした金子を表現したチェ・ヒソの名演が話題を呼んだ。日本でもブレイディみかこの『私たちのテロル』（岩波書店）が金子の生涯を取り上げ、最近でも、『文學界』で小川君代が金子を論じている。日本と韓国だけではなく、例えば、インドネシアでは金子の自伝の翻訳が2020年に出版されている。このような気運の中で筆者も、海外の友人に頼まれて、金子の生涯と思想を英語で紹介した。紹介文は、「革命的な女性たち(Revolutionary Women)」という冊子の第二版に収録される。

## 哲学者としての金子文子

現代の我々にとつての、金子の魅力とは何か。金子の魅力は、「歴史秘話」や「英雄伝」にとどまらないはずだ。いま金子を読む意味とは何か。本稿ではこれを考えるために、金子を哲学者として読み、その読み筋を考えたい。本稿が注目するのは、伝記的情報というよりは、金子の残したテキストである。金子は23年しか生きられなかった。大逆罪により死刑を宣告されたのに減刑されるも、獄中で自殺した。しかし彼

女は、法廷や尋問で思想を語り、獄中で自伝を紡いだ。本稿が注目するテキストとは、この二つである。証言と自伝。どちらも、他者に対して自らを語る、自己開示のテキストだ。筆者が考える金子の面白さとは、この自己開示に関わる。金子は自らを開示する際に、「誠実さ」にこだわ

る。この「誠実さ」へのこだわりこそが、金子のテキストを興味深くするのではないか。先の紹介文で筆者は、金子の思想を「誠実さのアナキズム(The Anarchism of Truthfulness)」と呼んだ。

「この「誠実さ」とは、どこまでも真実を求める態度のことを指す。そして、このような「誠実さ」の対極にあるのが、自己欺瞞やヴァニティ(虚栄)である。金子のテキストは、欺瞞への嫌悪と真実の追求によって貫かれている。金子が「誠実さ」に拘泥するようになったのは、彼女の人生によるところが大きい。無戸籍者として差別され、親の愛にもめぐまれない。善意を装った他人に利用されつつ、自己利益を愛するふりをしながら、自分の利益に反するとなると冷酷になる



## 何が私をこうさせたか

両親、世間体を損なわれるたびに金子を虐待する祖母、献身に応えないキリスト者、金子を性的に搾取した挙句さっさと捨てる左翼学生。自伝では、欺瞞にまみれた人びとが次々に現れ、金子を騙し、搾取する。この度に金子は直感する。何があるかと、欺瞞や虚栄だけは間違っている。そして、金子にとつて天皇制と帝国とは、壮大な「欺瞞」の体系だった。幽霊のような天皇を中心とするシステムが、「臣民」を騙して奴隷化し、騙された民衆の側も植民地で新たな奴隷をつくっていく。資本主義、家父長制、天皇制、帝国。欺瞞が溢れている。欺瞞と戦うにはどうすればよいか。欺瞞に勝つのはただひとつ、誠実さである。金子はそう考えたのではない。自らの罪も恥も何もかもを曝け出す自伝、大逆罪(死刑)になるにも関わらず天皇制への憎悪を語る法廷証言、これらは誠実さの実践であるように思われる。金子は、爆弾ではなく、むしろ誠実さによって帝国と戦った。

「誠実さのアナキズム」と呼ぼう。では、金子の「誠実さのアナキズム」とは具体的にどのようなものか。金子のテキストを紐解くと、三つのポイントがみえてくる。

第一に、「気づき」としての誠実さである。金子が強調するのは、欺瞞によって虐げられながら、自らは誠実であろうとしたことではじめて欺瞞の問題に気づくことができたという事実である。虐げる側の人びとは、自分が欺瞞に陥っていると気づけない。自分が受けた抑圧を他人に繰り返す人びとも同様である。常に欺瞞の可能性が蔓延している。しかし、誠実であろうとすることではじめて見えてくる問題があり、真の自分を求めるからこそ今の自分を疑うことができる。

第二に、「力」としての誠実さである。「自分は誠実だ」「真理は自分とともにある」という確信は、何よりも強さになる。誠実さへの確信がない人間は、どんなに思想を語ろうとも、権力に屈するだろう。死刑という脅しに屈せずに、自らの思想をあげすけに語る金子の姿は、「力」としての誠実さを示している。また、金子は法廷で、「自分は自分のしたいことをしているにすぎない」というエゴイズムを何度も強調する。このことも「力」としての誠実さによって理解できる。帝国の欺瞞者たちは、これを認められない。「天皇のため」と、自らの差別や残虐行為を正当化

する権威を持ち出さざるを得ないだろう。それは弱さである。金子のエゴイズムは、「力」としての誠実さの、ひとつの現れである。

第三に、「つながり」としての誠実さである。誠実に生きる人間は、誠実に生きる他人とつながる。金子は、朴烈を一目見て、彼の中にこそ本当の自分があると確信する。新山初代との友情も同じだ。「誠実な仲間と集まり、真の自分を求めて生活する」、それしかない。金子が強調するように、真の自分を求める誠実さは、自分へと閉じこもることではない。むしろ、誠実な他人の中に自分を見出し、つながり、共にあるようにすることだ。

筆者が考える金子の魅力とは、このような「誠実さのアナキズム」の呈示である。すなわち、金子は、「アナキズムとは、誠実に生きようとすることだ」と語っているのではない。その内実は、いまの自分を疑って真の自分を求めること、欺瞞と闘うこと、自分の行為が自分のやりたいことにすぎないと認める勇氣を持つこと、誠実な他者とつながりあって生きること、である。

## 参考文献

- 金子文子「何が私をこうさせたか」獄中手記 岩波文庫、2017年
- 鈴木裕子「金子文子わたしはわたし自身を生きる—手記・調書・歌・年譜 梨の木舎、2013年

## 気づき、力、つながり

誠実さを武器とする闘争。これを